# 令和５年度第２回自治体等 FM 連絡会議(東京大会)報告

須田　雅帝（すだ　まさあき）
沼田市 総務部 財政課 FM 推進係

## １　はじめに

令和６年２月２日(金)、東京都千代田区にある日比谷コンベンションホールにおいて、令和５年度第２回自治体等 FM 連絡会議(東京大会)を開催しました。

本連絡会議では、現地開催と Web 上での録画配信を併用し、現地参加者80名、配信参加者28名、合計108名にご参加いただきました。多くの方々にご参加いただき、盛大に開催できたことを感謝しております。

今回は、「公共 FM の軌跡と未来」と題し、長年にわたり FM・PPP に携わってこられた方々を講師としてお迎えし、公共 FM のこれからについて理解を深めました。

また、Web 配信等が一般に広まる中、現地参加することの意義を見出すため、Web ツール「slido」(その場に居る参加者が、リアルタイムでスマートフォンや PC から質問等を投稿できるツール)を使用し、会場に足を運ばなければ体験できない、全員参加型のライブ感のある大会を目指しました。

## ２　講演

### 講演(１)「エグい世界、リアルに生きる」

合同会社まちみらい 代表社員　寺沢弘樹氏

最初の講演では、合同会社まちみらいの寺沢氏より、自身が自治体職員として勤務していた経験や、現在多くの自治体でアドバイザーを務めている経験を通じ、全国の様々な事例を交えながら、公共 FM に携わる職員として持つべきマインドを叩き込んでいただきました。

リアルな世界においては、思うようにいかないことや裏切られることなど日常茶飯事のエグい世界ですが、心折れずにタフに生きることが我々自治体職員に求められているということです。

最初に、我々自治体職員の多くに心当たりがあるような耳が痛い事例の紹介や公共施設の問題解決について、多くの自治体で進んでいない実態のお話を通じて、総量削減一辺倒の「ザ・公共施設マネジメント」では対応できないことを思い知らされました。

その後、こうした繰り返される過ちから脱却しようとする自治体職員の取組み事例では、市長まで含めた全庁的な体制のもと、圧倒的なスピードでプロジェクトを推進している自治体や公共施設の再生のため、担当職員自らが出演し自分の言葉で PR 動画を作成しているなど、リアルな生き方をする自治体職員の姿をご紹介いただき、我々職員の覚悟次第でまちは変えられるのだという勇気をもらいました。

公共施設の課題が多く、何からやっていいか分からないといった担当者の声をよく耳にしますが、机上で計画を立て、悩んでいるだけでは何も変わりません。まちの課題と正面から向き合い、ジブンゴトとして捉え、できることから実践に移すことが公共 FM の最初の一歩だということを学びました。

どんな境遇にあっても立ち止まっている暇などないという強いメッセージとともに、タフに生きるということは、プロとして覚悟・決断・行動していくことであり、それは、職員自ら動いて「泥臭くやっていくことだ」という言葉が大変印象的でした。

写真１　合同会社まちみらい　寺沢氏

**講演（２）「公民連携による紫波町のまちづくり」**

**紫波町企画総務部 部長　鎌田千市氏**

次の講演では、紫波町の鎌田氏から公民連携の考え方に基づくまちづくりについて、「オガールプロジェクト」、「リノベーションまちづくり」、「学校跡地活用」の３部構成でご講演いただきました。

「オガールプロジェクト」については、FM に携わっている人であれば、知らない人はいないといっても過言ではないほど有名なプロジェクトです。

民間に委ねる覚悟を持って進めたこのプロジェクトは、「稼ぐインフラ」ともいわれ、逆算方式、テナント先づけ、プロジェクトファイナンスといった特徴を持ち、これまでの行政では行ってこなかった手法だと思います。

続いての「リノベーションまちづくり」では、オガールと駅を挟んで反対側にある日詰商店街の事例をご紹介いただきました。

このエリアで変化が大きかったのは旧役場庁舎で、この地は、公民連携による人の交流が生まれる場所として、温浴施設・サウナ・醸造所・コンビニエンスストアなどの機能を持った「ひづめゆ」に生まれ変わりました。隣にある旧郡庁舎も民間活用案が近日中にも発表されるということで、日々プロジェクトが進行しています。

また、商店街には若いプレイヤーが集まり、つながることでまちの活性化が図られてきていると事例を交えてご紹介いただきました。ご説明いただいた各スライドには、まちのプレイヤーの姿が掲載されていましたが、その方々の生き生きとした表情からは、まちの明るい未来を見て取ることができました。

最後に「学校跡地活用」についてです。七つの廃校の利活用について、民間、住民、庁内の声を聴き、公共等により利活用するものと民間により利活用するものを分け、「産業の振興」と「人材育成」という二つのコンセプトのもと、それぞれの廃校で基本方針を定め進めているとのことでした。

講演全体を通して、オガールプロジェクトを核として、プラスに働くスパイラルがまち全体に波及し、まちのプレイヤーを巻き込んで日々成長している様子をはっきりと感じ取ることができ、公民連携が秘めた大きな力を感じることができました。

写真２　紫波町　鎌田氏

### 講演（3）「ファシリティマネジメントに基づく実践例について」

浜松市市民部スポーツ振興課 課長　松野英男氏

最後の講演では、浜松市の松野氏から浜松市におけるファシリティマネジメントの実践例について、ご講演をいただきました。

浜松市では12市町村が合併したことで、多くの資産を持つことになり、これを何とかしなければならないというのが、本格的に FM を始めるきっかけとなりました。最初の取組み内容として、組織に横串を刺すことから始め、施設データの一元化、施設評価などを行い、適正な財産管理と計画的な活用ができる仕組み作りを行いました。

当時作ったこの仕組みは、今もなお、使われ続けており、施設カルテなどは情報が更新され続けているとのことです。そのような基礎データを基に、施設を継続するとしたものには適正化計画を、廃止としたものには廃止計画を策定し、徹底したマネジメントをしていきました。

また、そのほかの取組みとして、遊休財産の処分や貸付、施設の長寿命化など、様々な資産経営の取組みを推進し、多くの成果を出すことができたとのお話がありました。

その後、エネルギーの分野に異動しましたが、そこでも、施設のネーミングライツを始め、太陽光・蓄電池の設置、マイクログリッド事業、スマートシティなど多くの事業について、ファシリティマネジメントの考え方を根底に推進しました。

現在のスポーツ施策部門では、学校開放のスマート化や各スポーツ施設の更新や運営について、PPP/PFI といった観点から事業推進を図っていると事例を交えてお話しいただきました。

まとめとして、一元化したデータを使ってFMを回していくことによって、「ムリ・ムダ・ムラ」が明確になってくるが、PPP や PRE はその出口であって、目的ではないという言葉は、忘れてはならないことだと思います。また、「これらの考え方によって、健全で持続可能な行政運営と行政サービス向上につながると19年間信じてやってきた」という力強い言葉は、今回ご紹介いただいた様々な事業の成果に裏づけられていると感じました。

写真 3　浜松市　松野氏

## 3　トークセッション

○登壇者

・合同会社まちみらい 代表社員　寺沢弘樹氏
・紫波町企画総務部 部長　鎌田千市氏
・浜松市市民部スポーツ振興課 課長　松野英男氏

○司会

・常総市総務部資産活用課 主査兼係長　堀井喜良氏
・沼田市総務部財政課 主査　須田雅帝

トークセッションでは、自分のまちをよくしたいと強く思う参加者の気持ちが質問や意見となり、slido 上に多く寄せられました。

これに対し、講師の方々からは、時には厳しく、時には笑いを誘うような回答をいただき、会場内は大変盛り上がりました。

講師の方々が共通して使われていたのは、「稼ぐ」という言葉です。公共であれども持続可能な自治体経営には、やはり「稼ぐ」という概念は必要不可欠です。それを行政だけで行うのではなく、民間事業者と協力していかに魅力的なコンテンツ

にしていくかなど公民連携の重要性を改めて認識することができました。

講師の方々からは、このほかにも「公民連携から異分野融合へ」、「(住民と)適切に揉める」、「民間がまちに投資できる環境を整えるため、規制と誘導を行うのが行政の仕事」、「あらゆる分野にフックをかける」、「(民間企業と)癒着は絶対ダメだが、密着すべき」、などここでは書き切れないほどの多くの名言も飛び交い、これらは公共 FM の未来を切り開くキーワードだと受け取りました。

これらの内容を聴くことができるのは、現地参加者の特典でもあったと思います。また、会場内が一体となったこの雰囲気は、その場にいないと感じられないものであり、現地参加することの意義を実感できるものでした。

**写真４　トークセッションの様子**

## ４　おわりに

今回は「公共 FM の軌跡と未来」というテーマに沿った講演とトークセッションを行いました。講演やトークセッションでは、大変魅力的な事例や講師の方々の豊富な経験を紹介いただき、公共 FM の未来を思い描くきっかけとなりました。

しかし、勘違いしてはならないのは、これらの事例をそのまま自分たちの自治体に取り入れても成功しないということです。各自治体の課題に対し、その自治体職員が覚悟を持って向き合い、民間事業者や地域住民と協力しながら解決策を講じていくことが、その自治体の未来を切り開くということを忘れてはなりません。講演いただいたお話の中にもありましたが、我々自治体職員は、職場にこもらず、積極的にまちへ繰り出す必要性があると強く感じました。

そして、大会の熱気が冷めやらぬまま引き続き行われた交流会でも、活発な意見交換が行われ、自治体間の交流が図られました。

今大会では、自治体等 FM 連絡会議の運営要領にもある「FM関係者が一堂に集い、顔の見える形での情報交換、交流の場を設け、相互の連絡機能の強化を図る」という目的達成のため、現地参加をしてもらうことをより意識した大会運営を行いました。

全体を通じて、参加された皆様に前記目的を実感していただけたのであれば幸いです。私自身も講師の方々や多くの参加者との交流を通じて仲間ができましたし、それぞれが持つ熱意をひしひしと感じることができ、「明日からまた頑張ろう」という思いが、最後には身体の中でみなぎっていました。ぜひ皆様も次回連絡会議では現地へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

最後に、登壇者の皆様、関係者の皆様、参加者の皆様、そして幹事の皆様に深く感謝申し上げ報告といたします。

**写真５　交流会時の写真**